

# 辯證法に於けるシュライエルマツヘル

渡 邊 泰 三

## 序 論

### 一

この論文の意圖は必ずしもシュライエルマツヘルの辯證法の、他の諸體系に對する位置の決定ではない。それは私の權能ではない。題目の示す通りに、是は辯證法に於けるシュライエルマツヘルの研究である。私は彼の著作の中むしる最も乾いた響を以て聞える彼の體系的序述の中に、彼の人間を研究して見よう。併しそれは、彼を知るに必要な他の有名な著書を故意に押し隠して、迂遠な小徑を無理に押し進むことゝ同一視されてはならない。彼の全人格と全生活の歴史は、却つて、この書を通してはなくては完全に理解出來ないであらう。

シュライエルマツヘルたらんとする事は、今日既に若き哲學の徒の間に問題となり得ない。今日の批評家は彼の方法や總合から、何等の具體的價値を發見する事が

出來ないであらう。事實、今日までの哲學史がその注意をそゝいた彼の重要な理論的遺産は、むしろ彼の分析的、批判的、消極的方面であつた。彼の著書の中で重要な意義を附與されたものは、凡てかゝる觀點より選ばれたものである。而してそれに洩れたものは、單なる歴史的記録的興味の外等しく顧みられなかつたものである。十九世紀初頭に於ける觀念實在論 (Ideal-Realismus) 的潮流は、百年を経て第二の批判期の後、再び獨逸哲學の中心問題となつてゐる。何故さうであるのかを現在に於いて決定するのは大膽であるけれども、現今に於いて、何等かの意味で辯證法的な體系以外に他の體系は打ちたて難く思はれてゐる。かゝる時にあつて、シュライエルマツヘルに於ける、批判期のそれとは異なつた他の諸著が選ばれ讀まれる事を要求するとしても不思議ではない。是等の著作に於いては、普通に理解されてゐる彼の一面ではなくして、まさにその正反面が伺はれる。カントに對して、彼は辯證法をその積極的な方向に於いて理解した。彼は云つてゐる。「哲學者にとつては、普通に辯證法は哲學の消極的な部分に過ぎない。だが我々にとつては、辯證法は獨特な内容を有する哲學の本質的な部分である」(Schl.s Dia. 1—2. Hrsg. von Halpern) 人はこの書の中に、彼の長い思索生活の最後の反映と結論を見るだらう。彼にとつて辯證法は哲學

であり、哲學は又生活であつた。古い宇宙論的形而上學は、シュライエルマツヘルにあつて認識論的領域への見透しを抱く事によつて、益々歴史的社會的になつてゐる。認識の根據への問ひが、彼にあつては又存在性現實性への強い信頼となつてあらはれてゐる。彼はその多面的な關心を、豊富な生活關聯を、明確な、併し雜多な内容を捨象し易い一方的な理論に於いては、なく、生活そのまゝの發展的理論に於いて握しようとなつたのである。したがつて彼の血を受けた哲學の徒には、夫々の天賦に應じて、異色ある人々が産まれたのである。客觀性の充分な主張、その主觀への反射の側の問題が F. Überweg の關心となり、概念構成、普遍妥當性、知欲 (Wissensvollen) の原理の契機が C. Sigwart へその影響を與へたと云はれてゐる。讀者は、恰もシュライエルマツヘルがこの書に於いて一切の對蹠的なものに相對し相語つた様に、この書と相對し相語り、かくて彼がその書の名をプラトンから直接に選んだ意圖の如くに、對話を、内的辯論を、自己自身との鬭争を絶えず行ひつゞけるだらう。

## 二

シュライエルマツヘルが彼の友人達に彼の業務上のはかどりの様子を書きおきた書簡の中から、辯證法の成立史が理解される。勿論、私が此處に出来ることは單

に二三の史家の報告を再報告するに過ぎない。この著述は、ベルリン大學に於ける彼の成熟した最後の活動に屬してゐる。最初の覺書を記したベルリン時代の初めから彼の死の日まで、約二十五年間の中に成立したものである。

一八一〇年、H. Steffens をベルリン大學に招聘すると云ふ事が噂された時、シュライエルマツヘルは次の如き理由から、この選擇を「もつとも合目的な、もつとも必然な」と云ふ言葉をもつて歓迎してゐる。一方には哲學の偏重と、他方には自然科學に於ける豐饒な分科研究のために拒みがたく生ずる偏重の鈞衡をうるためにこの事が必要なのである。のみならず彼がこの招聘を希望した他の理由は、彼は將來一般哲學(彼は手紙の中で *allgemeine Philosophie* と呼んでゐるが、恐らくこの時代の意味に於ける自然哲學を指すのであらう)に對する講義の機會を持たないであらうと云ふ理由から、何等の態度も定めず、従つて顧みる氣もなかつた、併し將來講義する積りではゐた倫理學上の諸問題の擔當についてもステツフエンスが必要だとするのになつたのである。この年の十二月にはシュライエルマツヘルは、W. Gass. (こゝにあらはれてくる人々の名前を私は後に詳しく紹介する機會をもつだらう)に宛て、彼が既に倫理學の講義の準備に筆を染めた事を書いてゐる。彼はつゞけて「たゞ、私は

嘗つて君に、フイヒテが哲學の唯一の教授である限り、哲學上の如何なる講義もしたくないと誓つた。來年の復活祭までに、この誓ひを變更しなければならぬ様な都合になれば、私の哲學上の講義の序曲として、先づ辯證法を研究して見たいと思つてゐる。この問題は随分以前から、私の頭の中をうろついてゐるのです。」多分この意志は、既に一八〇三年に Gr. Reimer に次の如く書いた頃から萌芽してゐたものらしい。このプラトンのと、そして私がプラトンの上のみ建築出来る、今後の私自身の對話だけが私の唯一の慰めだ。」フイヒテに對する嫌惡の表現は、屢々彼の書簡の中にあらはれてゐる。フイヒテの哲學は大學の講座にはふさはしいものではないとさへ云つたと云はれてゐる。之に反して、彼はステツフェンスとは多くの點で非常に調和し合つた。ステツフェンスの「哲學的自然科學の根據」の序説を、シュライエルマツヘルは彼が同意し得る最高知識の序述だと云つてゐる。ステツフェンスは如何なる理由によつてか、職につく事が出来なかつた。教授の椅子は空席のまゝ棄て置かれた。かゝる状態にあつて遂ひに彼は彼の多面な關心を哲學的根據にまでさかのぼつて考へ、之を自ら講義せんと決心したのである。一八一一年三月彼はガスに宛て、書いてゐる。「やつと辯證法が出来上つた。隨分法外な時間を費しました。

是を公表するのは何んとなく氣に障るのですが、併し兎に角、私の手からは是がとび出したことを喜んでゐます。始める時には、大體重要な點だけがはつきりしてゐたのだが、書くにつれて細い場所まで段々明かになつて行つた。この分で行けば、全部うまく纏るだらうと期待してゐます。」一八一三年七月、彼は K. Brinkmann に次の如く書いてゐる。「講義の内容が益々私自身を先へ歩かして呉れる。――それから私は辯證法といふ題目の下に、思辨的な哲學を講義してゐる。根本問題だけは相當明確に序述したつもりだ。書く方の仕事は全く手もつけないでゐる。だが、私は決して著述家には作られてゐないのだから、その點は自ら慰めてゐます。」シュライエルマツヘルが辯證法に手をつけたのは、何よりも先づ倫理學研究のための準備であつた事は確かである。彼の弟子の一人なる A. Tweston は、シュライエルマツヘルは倫理學の完成を、一先づ辯證法の完成するまで延期したのであるらしいと告げてゐる。一八一三年から一八二四年までの間、彼は倫理學をたゞ一度しか講義しなかつた。之に反して、辯證法は三度も講義してゐる。個々の分科原理を自由に、それ自身から形成させると云ふシュライエルマツヘルの天才的な才能は、辯證法のこの特殊な依屬性の理解を困難ならしめた。何故ならば、倫理學との關係性は正しく辯證法の目的

であるが、同時に又、他の分科原理から生ずる他の色々の關係性の一つだからである。

一八一四年、シュライエルマツヘルは二度目の辯證法の講義をした。この際彼は、之を三百四十六章にわけて書き下した。一八一四年十月、ガス宛の彼の手紙には斯うある。「辯證法と云ふ題目の下に、私は暫定的に一先づ多くの章をわかつて書き上げたが、是は併し、來るべき完全な綱目に對する最初の準備に過ぎません。」同年十二月 Blanc (Domprediger in Halle) に宛てゝは斯う書いてゐる。「……もう一度講義をしたら印刷に付しても恥しくない様な順序に、私は今度の辯證法を仕上げるつもりであります。」政治的教會的な問題が、翌年に於けるシュライエルマツヘルの力を要求したために、彼の學問的活動は中止してゐる。一八一五年の終りに、新しい辯證法の計畫がガスに宛てゝ書かれたらしいが、その手紙は不幸にして失はれてしまつた。たゞ一八一六年三月付のこの友の手紙がその内容を伺はしむるに過ぎない。

一八一八年、シュライエルマツヘルは、辯證法の三度目の講義をした。十二月付のガス宛の手紙は簡潔に多くを語つてゐる。「繰り返して讀む中に、エペソ書の間違ひと、私の辯證法の正しさが、益々私にははつきりして來た様に思はれる。併しまだまだ多くの時が費されなければならない。人生五十年を既に私は背中に負ひ盡して、

今は私は幾分の隙もなく最も重要な仕事に熱中しなければならぬ。」翌年にガスは次の様な興味ある問を發してゐる。「それで、君がヘーゲルと不和になつたと云ふのは、彼の爲(De Weite)を指してゐる。ベルリン大學教授、神學者なのか、それとも辯證法の事に關してなのか、色々の噂を耳にしてゐるが、私はまだその事について賢くなる事が出来ない。」この事について確な事は、我々も探知する事が出来ない。たゞこの手紙の三日後にシユライエルマツヘルは、プリンクマンに宛て、彼の精神的な生産力乃至受動力は五十年の生活の疲にもかゝはらず決して衰弱してゐないと云ふ事を何度も念を押してゐる。彼は更につけて「私は長い間、何等公共的な舞臺に立つてゐないのだから、君は私の言葉を直接に信じて呉れなくてはならない。だが、新しい製産は私の講義の中にあらはれてゐるつもりだ。更にこの二三年、私は私の方法で以て、政治學、辯證法、心理學などを講義した。是等のものが紙上に印された時には、屹度君の賞讃をうけるに違ひないと信じてゐる。來年はそれから美學にまでも行き度いと考へてゐる。けれども勿論、若い人々の間に於ける生活、若い人々のための生活、それが特に私に快活な力を以てせまるのです。」斯う云つて彼は最後に次の事を強調してゐる。「私は宗教講演を書いて以來、全くあのまゝでゐるのです。」この

「講義に於ける新しい製産だとか、若い學生の間に於ける、若い學生のための生活」と云ふ言葉は、次の様な事情に於いて理解することが出来る。シユライエルマツヘルを論ずる人が先づ最初に云ふ様に、彼にあつて彼の最も都合よき理論探究の雰囲気は、講堂であつた。其處に於いて彼の思想は、判然とした形を備へる事が出来た。彼は、机の前に於いては、は無く、聽衆の前に於いても、つともよく自己を感じたのである。

溯つて一八〇五年、ブリンクマン宛の手紙の中でシユライエルマツヘルは語つてゐる。「講義の最初にあつて、全體の概括的釋明の計畫が先づ私の頭をつよく占領する。所がやりかけて見ると、益々細い所が氣になつてくる。それから私は、次の時間のための講義に必要な事柄を色々書き留めて置くことが出来ず、思ひのまゝ話するので、一時間でやる積りの講義が屢々一時間以上かゝる。此處では私は全く新しい社會の人間になつたつもりである。教會で練りかへした説教の訓練など、此處では全く役立たない。だがそれにもかゝはらず、カンツェルに於いてよりはカテデルに於いての方が、私は私の思想に一層自由な経過をたどらせる事の出来るのも事實だ、と云ふのは大學の講壇では、之迄思ひもつかなくなかつた問題の暗示や、將來考へて見たいと思ふ仕事の多くが、電のやうに私にひらめいてくるのだ。」一八〇八年の十月、彼

は彼の妻 Henriette von Wyllich に書いてゐる。「この問題については、私は今の所講義をやりたいと云ふつよい要求をもつてゐる。是がいつでも私には一番いゝ方法なのだ。何故かと云ふと、講義をすることによつて色んな事が思ひ付かれて來て、それ自ら自然に仕事を運んでくれる。斯うなると、私の喜びであるいそがしい仕事に、再び歸つて來たと云ふものだ。とに角講壇に立つ事が私にどんなものを與へる事か、お前は注意して見てゐてくれるとよい。」同じく十一月妻におくつた手紙では、「引きつゝ講義をやらなくてはならない。どうして私が講義にとりかゝるかをお前も今後屢々知る機會のあるのを希望するが、私が勢よく進行出来る以前に、迂廻した不確な熟慮のために、元來それには直接必要でない事を考へる事に、どれだけ多くの時間をつぶすことか。だが、段々序述してゆくにつれて、私には段々はつきりして來るし、事自らが次第に融けてくる様だ。」と書いてゐる。その翌年、彼は更にヘンリエツテに手紙を送つてゐる。「……併し、私に今最大の喜びを與へてゐるものは、私の講義です。最初の時間は何故となく不満だつた。だが、今では講義が聽衆に浸みわたつて行くのを感じてゐる。凡ての事が益々整頓され、今こそ我々が眞理を握してゐるのだと云ふ事が益々明かになり、講義は益々容易になつてくる。そして講義

の途中で、私のまるで考へてもゐなかつた事が、つまりそれ自ら發展するある特別なものが、屢々私に襲ひかゝるのだ。それで私自身は却つて、毎時間教へられて歸つてくる事がある。この喜びがどんなものであるかを、お前に云ふ事は私には出来ない。』

この事は後に詳しく語られであらうが、シュライエルマツヘルに特有な講義の態度の外的原因には、彼の視力の缺乏が與つて力があつたらしい。彼は度々、他の讀書があると云はれてゐる。だが彼の方法の深い内的根據は、學問に於ける學ぶ性質の側ではなくして、教ふる性質の側の充分な理解であつた。シュライエルマツヘルはプラトン研究に際して次の言葉を待た。「研究と發見とは交互的でないから併しそれは親密な二つの心の自然な懸引力によつてのみ可能である。目的意識がつよければつよい程、探究にのみ志せば志す程、人は危險に陥り易い。」(Schl's *Überse-*  
*zung* Plurons, 3 A. I, 14 f. und 154. Halperns Vorw. XXIX von Schl's Dia.) ソクラテス及びその學生間に於ける方法的對話を、彼は少くともよき意味に於ける嘘構として確保したのである。それ故にこそ彼は時には斯うした皮肉をとばさへした。「十年一日の如く同じノートを讀み、同じ事を學生に筆記させる教授は、不都合にも未だ印刷

術のなかつた時代を我々に思ひ出させる。けれども今日に於いては、何人も何故國家がかゝる朗讀のために、高い年金を費つてゐるのかを理解に苦むだらう。彼等は實に、この俸給を以て、印刷術の能力を不能にする特權を享樂してゐるのである。」

E. Bratuschek; Schl. Philos. Monatshefte II, 13 und Erdmann, Grundr. der Gesch. der Philos. I, Vorw. X.) 我々はこれらの諸通の手紙の中にシュライエルマツヘルの講義の態度を知ることが出来る。

一八二二年、辯證法は四番目の講義にのぼつた。根本的な校正の状態についての手紙は何處にも見當らない。當時シュライエルマツヘルは國家的活動の最上にあつた。一八二四年十二月彼はガスに宛て、斯う書いてゐる。「私の仕事も、もうこれでおしまひだむしろ私はこの方面のことでは免職になる事を望みたい。」理論的興味に於いて、當時の彼はなほブラトンと基督教教理について考へてゐたのと、それから彼の説教集を印刷に付したのに過ぎない。一八二六年には、シュライエルマツヘルは汎神論とスピノチスムスに對する熟した懷疑から辯證法の公表の必要を感じてゐる。その八月彼は Gross に宛て、斯う書いてゐる。「……私は出来るだけ早く辯證法を公表したいと思ひます。世間で色々騒げる事と思はれますが、結局そ

の答辯が一番役に立つのかも知れませんか。」次の月に更にこの事に念を押してゐる。「私の辯證法の短い綱目を發表する事さへ出来れば、他の内容的な事柄は、これと關係的に講義する事が出来るでせう。」併し彼は矢張り其處までは行かなかつた。彼自身の言葉の如くに、彼は未だ常に「焰をあげて燃えないでも、少くとも石と煙を吹き上げる火山」であつた。(Dilthey; *Leben Schis Anhang*)翌年三月(一八二七)彼は de Wette に告げねばならなかつた。「私の學問的活動に、私は今非常に不満足であります。私は殆んど貴方に顔を合はず勇氣もありません。實の所教理研究以來私は全く何もしてゐない。私は自分の性格の中に、精々よく見た所で、所謂學者の中の斯う云ふ特別な性格を持つた人間をしか見る事が出来ないのです。」と云ふのは、私の仕事は讀みもせねば書きもせず、たゞ思ひついたまゝの思想を語り、直ちに自分では忘れて了ひ、再びやりなほすと云ふ事です。」

一八二八年、シュライエルマツヘルは辯證法について五度目の、そして一八三一年には遂ひに最後の、しかもその都度充分な改纂を経た講議をした。この時代の彼の状態について、彼の手紙は沈黙を守つてゐる。けれどもシュライエルマツヘルが尙一度印刷の目的で辯證法を書き下したに違ひないと云ふ事は、殘された最後の清書

を見る事によつて理解出来る。それは全然新しい組立をとつてゐて、五六章はたしかに取り拂はれてゐる。

一八三四年、二月四日、不快のための二三日の休講の翌日、彼の弟子 Ludwig Jonas に彼は語つた。「この小閑暇を、私はどんなに柔い氣持で、自分について自分と問答した事だらう。さうしてゐると私は全く新しい決心がついて了つた。君も知つてゐる様に、私は私の辯證法と基督教倫理に、教理をもつた形式を興へたいと考へてゐた。けれども私はもうその計畫を捨てた。私はいそいで其等を百科全書をもつた姿のまま、で世に出すことにしよう。さうすれば兎に角萬事を完成することが出来る。

他の方法では駄目だ。」(B. Weiss. Zeitschr. f. Philos. und philos. Kritik B. 73, 5, 12) 死の數日前、シュライエルマツヘルはかくの如くにして彼の仕事の整理をした。彼は肉體的に彼の書物を二度と検討する事が出来なかつたし、又それを喜びながら優しく死んで行つた。二月十二日、それが彼の命日である。死の直前更に彼はヨナスに語つてゐる。「私は私の手帳を全部君に一任する。よろしくやつて貰ひたい。特にその中でも、辯證法と基督教倫理とそして私の使徒行傳に關する覺書を推敲して印刷して頂きたい。」尙一度、彼が洩らした最後の言葉は斯うであつた。阿片麻酔の死の床

で。「私は今意識と無意識の間を彷徨してゐる。併し私の心の中では、私は神々しい瞬間をはつきりと體驗する。——私は今もつとも眞劍な思想を考へねばならない。だがそれは、私にとつて祕かな深い宗教的な感情と全く同じ事だ。」 (Job. in Br. II. 511 f.)

辯證法に關して此處に選ばれたシュライエルマツヘルの書簡から、我々はこの書の成立の歴史について知らうとした。彼の口から洩れる希望大膽、自負、若しくは悲觀、小心躊躇の度重なる交替は、勿論彼の性格の端的な現れではあるけれども、その手紙の宛名の種類とも密接に關係してゐることを忘れてはならない。これらのことは後に多少明かにされるであらう。我々は既に、辯證法が決して一度に書き下されたものではなく、彼の成熟期から晩年にかけて、長年月の中に成立したものである事を知つた。我々はその後、如何にしてこの辯證法が編輯され出版されたかを進んで知らなければならぬ。

### 三

師に對する熱烈な愛着の中に、ヨナスは「智を求むる若き學徒」のために、辯證法の編輯と云ふ勞力多費の仕事を引き受けた。彼はシュライエルマツヘルの手から辯證

法に關する一切の手記より小紙片に書き留められた覺書に至るまでわたされてゐたのである。是等の書類には、一部は講義の前に、一部は講義の後に、横線、見出語、多少詳かに縮められた思想の行方、傍註が無數に書かれてゐた。この多くの手記の中、その機構のもつともよく整理されたのは、一八一四年の講義録であり、もつとも完成されたものと見るべきは、印刷の目的のために手をつけられた最後の斷片である。だが不幸にして、最後のものは書物としての體裁を備へてゐない。かゝる理由からしてヨナスは、一八一四年の辯證法をその前景に据ゑ、他の記録を秩序だて、之を年代順に附録として印刷させたのである。(前章にて明かなる如く、この附録はAよりFまでの六種をふくむ。)不必要と見える注意書、短い概略、或ひは空虚を補填するため、彼は一八一四年以外のシュライエルマツヘルの講義の筆記を自由に利用する事が出来た。しかも極めて重要な箇所は之を抜萃して、年代順にではなく本文に結びつけた。辯證法の讀者に對してその難解點の解明に資せんために、彼は多くの散在した註釋を加へる事も怠らなかつた。一八三九年シュライエルマツヘル全集の刊行に際して、六一〇頁あまりの出版があらはれた。

一八七九年、B. Weiss がその校正を企てた。彼は一群の傍註と、彼の加へた所では

十數枚に渡る警句やシユライエルマツヘルの最後の推敲の準備などが印刷されずに残つてゐる事を發見した。彼は更に之を附録として(卽ちG及びH)として公にしたのである。だが彼の正確な文献學的探究も極く僅かに前の出版を非難するにとどまつた。たゞ彼はこの書物の取り扱ひの極めて不便なることを指摘して、その修正に對する強い要求を語るとともに、トヅエステンがシユライエルマツヘルの倫理學の出版に於ける態度と同じく、辯證法の純粹な選擇を希望してゐる。

一九〇三年、ジグワルト及びデイルタイの薰陶をうけたH. Halpeの校訂になつた尊敬すべき出版が出た。私のこの小論の引證は盡くこの書による。前述に於いて知られる様に、シユライエルマツヘルに於いては特に彼の課題の解決は、豫め見定められた終局の場所を持つてゐなかつた。彼は一時間の講義の中に、次の講義の方向を會得すると云ふ方法を以て彼の仕事をつゞけて行つたのである。尤も社會的現實性の主張と權利に對する彼の驚くべき公平と寛容も、決して彼自身の獲得した思索態度を覆ひつくしはしなかつたであらう。彼も亦、主觀の不變な超起的根據の權利を述べる事を常に怠つてゐない。だがそれは、彼にあつては、いつでも漠とした確信、希望に過ぎなかつた。彼の講義はむしろそれ自らで序々に、だが常に新しく發展

して行つた。此處にシュライエルマツヘルの研究の困難があるとともに、又、彼の辯證法を一つの書物として印刷する事に特別な勞力を必要とするのである。以下ハルベルンのその出版に關する自負を聞かう。

「グイスの改訂以後、何人もこの問題に手をつけることなしに、約二十五年が流れた。この状態は、學界に如何に落膽すべきものとして働いたことか。長年、辯證法の研究にたづさはつた結果、改訂版が是非必要であると云ふ確信が、遂ひに私を、大學の諸教授たちにも薦められて、新しく校訂して見やうと云ふ決意にまで導いた。ヨナス版に私は次の様な缺點を認めざるを得ない。

一、一八一四年の講義内容は、尤も相當纏つたものでもあり、且、可なり順序よく書かれてはゐるが、之は印刷の目的で印刷されたものではなかつた。併し、之が背景となつて讀者の前にあらはれる事は、同時に又他の附録をあまりに背景に押し込める事になると云ふ弱點を持つ。勿論この所置の不完全性は、ヨナスを多くの註解にまで導いてゐる。だが一般に、註解は研究を一層面倒にする事が多い。したがつて近代の引用文の示す通りに、辯證法の多くの利用者は、ヨナスの原本にのみ制限されて、シュライエルマツヘルの眞意を解してゐない。ヨナス自身も亦、一八三一年の草案

をもつとも成熟し完成したものである事を認めてゐるのである。

二、辯證法のその後の起稿にかゝる草案や斷片の研究を望むものは、この書の頁に屢々必要缺くべからざる講義の拔萃を見失ふ。何故ならば、一八一四年の講義の修補の際それに對する何等の指示もなく、撒き散らされてしまつたのである。

三、ヨナスの出版の序文に見られる様に、彼は著者を汎神論に對する懷疑から淨化し、それに關する箇所を特に印象づけて取り出す事に努力してゐる。拔萃文をわづらはしく濁してゐる彼の説明や指示は、却つて彼が解かんと試みた難所の中へ人をもつれ込ませる。有意義ではないではない文章の相違を、彼はたゞ言語上の相違として説明してゐる。

四、内容の根本的概括を、一八一四年の草案のみが與へてゐる。他の草案に對する、原書中の短い報告など何等満足すべきものがない。原稿中、一度しか繰りかへされてゐない序述(たとへば附録Aに於ける、時間と空間の問題)について、あらゆる評註がかけてゐる。

五、グイスが指摘した重要な欄外註や注意書が印刷されてゐない。

確かに、年代順に積まれた、更に完備した新しい出版が必要である。私の調べた限

りでは、シュライエルマツヘルの手記は既に全部印刷に付されてゐる。彼の講義原稿に關して、その行衛のわからないものは見當らないが、たゞ更に包容的な整理が望まればしないだらうか。私の計畫はかうして他の方向に走つた。私の役立ちたいと欲するものは、批判歴史的的目的に對しては、はたなく具體的な目的に對しては、ある。何等かの矛盾した傾向なしに、完備した一貫した辯證法の姿を、その成熟した構成に於いて抜き出すことを私は欲する。先づ第一に注意されなくてはならぬ最後の講義録(即ち附録E)は——不幸にもさうある事を運命が望んだのであらうが——外形的には最も不完全である。是は空虚が最も多く、序論に於いては非常に切れぐで、あり、方法論に於いてはたゞ斷片のみに過ぎない。

斯界の權威より、私は辯證法を自由に再現して、之をテキストとして出す事を、その際、一々の訂正、充填の箇所を、他のシュライエルマツヘルの草案の中からその典據として示す事を薦められた。この計畫の熟考の中に、私は次の確信に達した。即ち私はこの事によつて、辯證法の發展をたどりながら結局文献にふくまれた辯證法の位置を越えねばならぬのではないだらうか。何故ならシュライエルマツヘルの辯證法の機構は、一貫して之を二つの極點から、即ち宇宙的なるものと個人的なるもの

対立から建築する事に明かに努力してゐるのか、はらず最後の草案ではこの  
 対立の構造が中途にして切れてゐるからである。更にシュライエルマツヘル  
 の思案にとつて最も重要であり、且つ最も巧みに細工された確信の原理 (das Prinzip der  
 Überzeugung) は、附録 E の原稿に於いては、未だこの問題の生じてゐなかつた附録 C に  
 於けると同じ役割をつとめるかも知れない。又辯證法の對話言語、知欲、その他の極  
 く僅かな根本綱目への發展的縮少は、附録 F の示す如くに、附録 E を越えることによ  
 つてのみ可能である。附録 E に於いては、始めてあらはれる所の、時間的知識と無時  
 間的知識の対立は、どうしても作爲を加へられ、他と結合される事を要求してゐる。  
 かゝる大膽な試みは失敗として指摘されるのに、好都合な危険を如何にたやすく走  
 る事であらうか。何故ならこの考をやりとげる事は、既に固定した方法が確立して  
 はならない制限を誤つて通り越えたと云ふ危険の下にさらされる事である。だが  
 幸ひに、私はこの計畫を放棄した。何故なら私は、シュライエルマツヘルの體系は一  
 般に完全に組織され得るものではない、構造は偶然な地點にとゞまることを嘉しと  
 すると云ふ確信に達したからである。

私の決意は、シュライエルマツヘル自身の方法を以て、彼の講義録や手記を頼つて、

辯證法の中心に近かんとする事であつた。私は附録Eを中心として、之を他の多くの草案より補充するのにきめた。かくて夫々異なつた取り扱ひにより、私は辯證法を三つに區分する事が出来た。

(一) 附録Eの草案とその講義抜萃からつゞられた序論 (einleitender Teil) に關しては、私は他の草案にも依頼しなければならなかつた。それ等と比較する事によつて、私は對幅が殆んど存在してゐない事、彼等は凡て同程度の價值を有してゐる事、彼等は互ひに衝突する事なしに多く互ひに補ひ合ふ事を認めた。私は之を一定の思想群に (Gedankengruppen) に分解し、對應せる箇所を縫ひ合し、秩序をつけて一つの全體に編纂した。本論に於ける結果への忠實なる見透しから、此處で認識出来る限り、私は最も合目的と思はれる結合の順序をとつた。附録Fに於ける最後の序論の斷片は、ヘーゲルに對する位置のために殊に注目すべきであるからして、特に付け加へる事にした。

(二) 先驗論 (transzendentaler Teil) に關しては、附録Eの草案とその抜萃が私の規準となつた。先きの辯證法の發展史と云ふ私の論文に於いて、(im Archiv. f. d. Gesch. der Philos. XIV, 210.) 私はこの草案は、構造に於いて首文に結びつける様に企てられたも

のである事を論じた。今やこの最もよき草案を、他の斷片、拔萃より補充せんとするに當り、この要所要所を全體的關聯に於いて検討しなければならなかつた。したがつて又、比較的弱き論點乃至不必要にしてむしろ不成功と思はれる論點を除外する事もつとめねばならなかつた。之に反して異文ある箇所、或ひは論題がその草案に於いてのみあらはれた箇所は、必要と思はれるものは凡て付け加へる事にした。かゝる完成への努力に於いては、トヅエスランのとつた摘要的態度 (Zusammenfassung) に於ける)とは反對の態度をとつた。私は辯證法の思想を文章から文章へと檢査し結合し、シユライエルマツヘル自身が正に欲した通りに私は處理したつもりである。

(三) 方法論 (technischer Teil) に關しては、附録 E の斷片が最良の研究である事は私には確實であつた。私はたゞヨナス出版の原本に於いて、そのの繼續としてあらはれてゐるものをあつめて、前二者に連續せしむればそれでよかつたのである。

シユライエルマツヘルの辯證法は他の諸原理に於いて譯者註、——倫理學、心理學、教育學、美學) 同時にその適應、補充乃至繼續を見出してゐると云ふ考へからして、私は之等の著作からその中心思想を引きぬき、合目的な順序に於いて附録としてこの書物に付け加へた。何故なら辯證法の對象たる、全體に於いて自己を形成する知識は、

他の異つた方面よりも明かにせられねばならぬからである。(哲學史及び國家論の研究に於いては、何等必要なものを認めない故、これを除外した。)たゞ紙數の經濟から、その理解のために必要な諸々の異文について注意はしたものの、この附録は全體にたゞ重要な部分にのみ限られた。

この書物にふりむけられた餘りに巧みな配列、細心な註解からくる原著忘却の危険にさへ注意すれば、この書の我々に益する所は頗る大きい。我々のより正しき理解のために、句讀點、正書法、文法、言葉の補充などに對するハルペルンの精細な腐心は一通りでない。この小論を稿するにあたつて、彼に敬意を表する。

## 本 論

### 一 一般辯證法の歴史

シュライエルマツヘルの哲學への歴史的な動脈の起點は、勿論カントである。彼は先づ最初何よりも前にカントに育てられた。したがつて彼が後年、スピノーザからプラトンへと跳躍したとしても、それ等は凡てカントによつて喚起された問題の解決のために必然的であつたと云はれる事が出来るであらう。かゝる理由からし

て、此處ではカント以後シュライエルマツヘルに至る諸大家の學說の検討のみが必要であるかも知れない。併し、彼は浪漫學派に於ける最も多面的な人であつた。彼は、彼が如何なる宗派乃至學派に、如何なる人間の類型にも、押し込められる事を最も嫌つた。彼の遺著の中から、人は驚嘆を以て彼のアリストテレスに關する小論や、教理史に關する諸説をも探し出すであらう。私は、一般辯證法の歴史を、シュライエルマツヘルの哲學の理解に資せんために、我々の記憶に繰り返して見やう。

反省と云ふ事と同時に伴ふ、反省するものと反省されるものとの對立を克服するために行はれる、總じて辯證的と云はれる思考法乃至實踐法は、遠くギリシヤのバルメニデスとヘラクライトスからはじまつたと云はれてゐる。一般にかゝる對立の克服は、形式的には、三つの姿をとると考へられるであらう。一は反省するものによつて、反省されるものを覆ひつくす方法である。(勿論、辯證法に於ける最も特異な性質は、それ自身で存在する所の二者の對立ではない。二つの個物は、對象的には同じく一つである。自己の主張が、却つてその主張の故にその反對者に陥る所の矛盾が、辯證法の特質である。したがつてこの場合一の定立は、他の定立にその根據を置くと同時に、他の定立は一の定立にその根據を置く事恰も反省するものとされるもの

ゝ如くでなくてはならない。私が此處に列擧する三つの方法は、何れもかゝる思想にその重心を置いてゐる。若しさうでなければ、反省するものゝ完全な勝利は、最早辯證法の名に値しない。この道を歩んだバルメニデスは有の概念より出發して經驗世界を拒否した。ツエーノーンは深刻な論理をもつて、運動と雜多の不能を證明してゐる。二は、反省される側よりして、反省するものゝ側を極度に壓縮する方法である。ヘーラクライトスは確實不變と思はれるものゝ破滅を永劫の彼方に見透す事によつて、瞬間に於ける微妙なる變動をも見逃さなかつた。三は、兩者の折衷的であると同時に綜合的な方法である。是は臆病であると同時に又具體的な方法である。一般にかゝる方法は、前二者の自然的發展の結果であるが故に、その脆弱性にもかゝはらず、近代的な味を持つと考へられるであらう。エレア學派に於いては、有としての性格をおびた反省するものゝ側が遂ひに影をしぼめて、漸次機械論乃至唯物論に轉化して行つた。ヘーラクライトスはこれと正反對に、萬物流轉の法則をかへつて常住なる認識根據としたのである。かゝる前二者の矛盾、一つの矛盾を克服するため犯された第二の矛盾は、所謂ギリシヤの啓蒙時代に於いて鋭く氣付かれたのである。問題の現實なるもの、人間的なるものが、永遠の世界から引きおとされ

たのは、單純素朴莊嚴な人類生活が、漸く社會性をおび始めた兆候を如實に語るものとされてゐるが、所謂かのソフィスト達の中には、現實的なものゝ習得の有利と方法を教へたにとゞまらず、現實的なものを關係的なもの、しかもその限りに於いて實在的なものとして把握したものゝゐるのは驚嘆に値する。ヘーラクライトスによつて鬭争の王者として直觀された最後のロゴスの不變性に對する懷疑から出發して、反省されるものゝ變化乃至作用と同時に、反省するものゝ作用變化との間に於ける關係概念 (To-Hebas-To) を發見したプロタゴラスは、一先づ辯證法の完成者と見做す事が出来るであらう。

併しながら、永遠の眞理を否定し、一時の效用的な賞讃を博するために教へられた修辭と技術は、一般に懷疑主義として特徴づけられる。ソフィスト哲學の辯證法は、その限りに於いて、尙悪き意味での消極的である事を免れる事は出来ない。その生命を現代にまで送りとげ、その薫香の寶庫の故に、近世の哲學が諸々の形に於いてあらはれ、又解釋される所の辯證法は、ソフィスト以後に於ける華々しい哲學に於いて、始めてその名に値したのである。この時代の消息について、殊に無學な私には、かゝる偉人達の哲學の如何なる分析と展望も許されないのであるが、辯證法のその言葉

の爲めにも、而して又、シユライエルマツヘルのベルリンに於ける一般哲學に對する長期の仕事が、彼のプラトン翻譯以後に屬して居り、而も是と極めて重要な關係を持つてゐるためにも、私は普通に知られてゐるこの時代の哲學の歴史的發展の順序を簡單に記して、後述に備へたいと思ふ。

グインデルバントは、ブレルーダイエン中の「ソクラテスに就いて」に於いて、文字を後世に傳ふるなき迄に市井を馳驅した實踐者を、繪畫的な筆致を以て書き出してゐる。忽ちに群集を押しつけてその中に割り込み、自ら高うして才智を得る知者達と、彼は一體何を語つたか。辯證的な戦ひは、正にこゝに於いてその古典的な類型を見る。知者は敗北した。彼等は無知を表白しなければならなかつた。而して無知の自覺者ソクラテスは、その無知の充分な知の故に、凱歌をあげたのである。一人と一人が口舌を以て相對し、俗知は止揚されて眞知に、効利は否定されて道徳に到達した。無知の認識は、眞理への出發である。プラトンはこのソクラテスを問題とした。而うして、ソクラテスに於ける内包的に實踐的な領域をうち越えて、この方法を一層一般的な問題に適用したプラトンは、こゝぞ辯證法の最初の確立者である。併しながら、彼がこの表現に與へた内容を理解することは容易でない。プラトンの研究者は一

般に、その言語學的文献學的考察よりして、プラトンの對話篇から、純粹にプラトンの體系を取り出す。口語られたソクラテス、パルメニデス、エレア學徒、テイマイオス、アテナイ人の言葉よりして、プラトン自身の産み出した學問的内容を丹念に選りわけける。而してこの事こそ、プラトンのアカデミーに於ける生ける講義を最早聞き得ない我々にとつては、正にもつとも純學者的な研究の方法である。併しこゝで問題になるのは、プラトンが如何にして對話を書いたかである。(彼の著作中、アポロギア及びエピストレーは除かれねばならない。それはこの著の性質よりして明かである。) ヴインデルバントはその著「プラトン」に於いて次の様に云つてゐる。「かゝる序述法は必ずしもプラトン一人に屬するものではない。それは廣く用ゐられた技巧様式であつて、我々は決してプラトンをその始祖とする事を許されない。人は直接に、アチカ風の活動乃至思考に於いて、かゝる歴史的に獨特な様式に出遇ふであらうが、それ以上に、この方法はソクラテスによつて規定された文献の全範圍に特に本有的なものであつたのである。」(S. 30) 我々は古代東洋に於ける哲學的諸文献よりして、かゝる技巧様式の普遍性に關する暗示を受けないわけではない。だが、プラトンは嘗て會話術(Unterredungskunst)としての辯證法を學問的態度と呼んだ。(J. Cohn: Theorie

der Dial. (Kirk, S. 9.) 我々は、その欲する所を述べんとするに際して、プラトンにかゝる形をとらしめた所の歴史的惹起をではなくして、何故かゝる方法を彼が選んだかの意圖を問ふ事は果して無益であらうか。何故ならば、我々は彼が體系的論理學の偉大なる先驅者であり、數學の尊敬者であり、學問的淨化の擁護者であるにもかゝらず、自ら學術的序述の嫌惡すべきを語つた事を知つてゐるからである。シユライエルマツヘルは辯證法の講義の出發に際して、常に辯證法（ドイツ語）の、従つてこの會話術 (Kunst ein Gespräch zu führen) の歴史的な分析より始めたのであつた。學問的會話、それが辯證法の故郷である。併し、學問的會話は、ソクラテスの警告の如くに、最早單に敵手の言語の閉塞と壓服、機智の戦ひではない。それは、主張の、主張せる人間ではなく、戦ひと同時に、眞理への意志をふくんでゐるのである。Dialektikの名は *Dialektik* より基立したものであるが、其處に二つの補足が必要である。——*τέχνη* と *ἐπιστήμη* (Schl.: Dialektik, S. 4.)

論争は二人の會話者が同等の力を有する場合に完成される。彼等は相互に好敵手であり、その意味に於いての同僚でなければならぬ。彼等には相手の辯論に對する注意深い傾聴が必要であると同時に、先入的な尊敬が加はつてはならない。か

くて彼等は相互に自己の確信せる所を飽く事なく披瀝し、他人に自己の確信を承服せしめる勇氣をもたなければならぬ。こゝに辯證法の主觀的意味が成立する。かゝる主張は尙客觀的に單なる臆測なるが故に、辯證法はかゝる臆測より、よき結果を、即ち眞理を發見しなければならない。

プラトンの對話が純粹にかゝる形をとつてゐない事は明かである。我々は彼の著作の各頁に、殆んど洩れなくソクラテスの名を讀むであらう。勿論、彼の最後の著作「モイ」に於いては、ソクラテスの名は全然缺けて居り、これに先立つ二つの著作「イマイオス」及び「クリタイアス」に於いては、彼はその序曲を歌ふに過ぎない。而して之より更に早期の著作「プロタゴラス」に於いては、ソクラテスの役割は、その相手の役割とは特異な姿に於いて、可なり平等に分割されてゐる。がそれにもかゝはらず、プラトンの對話篇の大部分に於いては、彼の師ソクラテスをもつとも重要な立役者であり、むしろ會話の指導者である。こゝよりして、プラトンの對話篇が、クセノフオン及び恐らくその名の消え失せた他の人々と共に、彼等がその師の最も忠實な生徒である事を示すために、若しくはその師の面目を更に完全に飾るために、書かれたものであるとして、屢々解釋されるのである。併したとへソクラテスがその話相手の位

置と同じく評價されはしてゐないとしても、而も彼は決して知者ではなく先生ではないのである。絶對的な裁判官であり、結論者でありはしないのである。若しソクラテスがかゝる者であつたならば會話は最初より虚偽であり、無價値であつたであらう。幸にも彼は産婆にすぎなかつた。彼の智識は皮肉にはなく、彼が何事をも知らないと言ふ事に存してゐた。彼は知の形式を、眞の知が如何なるものかを自覺してゐたのである。したがつてプラトンの對話篇の興味は、正しく形式なき臆測と主張が知識の形式の中に如何にして止揚されるかにつながるのである。而してこの事はソクラテスの名の缺けた對話の舞臺にもあてはまるであらう。何故なら、プラトンは學問上に於けるソクラテスの意義をもつとも充分に理解してゐた筈だからである。プラトンは自己の如實な經驗から發展したものをソクラテスの時代と社會に移し、彼自らが爲した爭論、彼自らが彼の學生と共に爲した仕事を、ソクラテス及びその同僚の間になされた経過の如くにあらはした。こゝにプラトンの言語に對する卓越した感覺、愛すべき個性と豊かな饗宴の序述の外に、又理想的範型的表現の意義がある。一般に彼の若き時代の作品に於いては、アカデミーの氣風と同時代の敵手との間の、學問的宗教的、道德的、爭論の香りがたゞよひ、比較的後期の作品に

於いては、アカデミー本来の面目たるイデア論が古代の形而上學的原理或ひは近時の研究に刺戟され裝飾されて、アナクサゴラス、ピタゴラスの敎説同時代の自然研究若しくはデモクリトスの唯物論との同化が問題となつてゐると云はれてゐる。これと關聯して、ソクラテス自身にとつて不得意であり、また之を爲さざるを誇りとした自然研究がその題目とされた所では、プラトンの初期の對話篇に於けるが如き臆測の矛盾が、ソクラテスの相互の辯争の中に說かれるのではなくして、『プロタゴラス』に於けるソクラテスの獨語的辯論に於いても、かゝる意味の辯證法の意義は決して失はれたわけではない。曖昧な概念から結果する矛盾は、充分に検討された概念の中に解かれるが如くに見える。ステンチエルは、この辯證法の意義の轉換と、プラトンに於ける研究對象の轉換との關係を指摘した。假説の確立、概念の純化、其處には狹義の論理學乃至個別科學に對するプラトンの位置が呈出されるであらう。だが、哲人プラトンの全體はこれによつて決して擱めるものではない。バルメニデス、テアイテトス、ソフィステスの如き學術的對話の語られる所では、たしかに彼の若き著作に於けるが如き、ほのかな、味深き言葉に乏しい。けれどもその後の著作テイマイオスに於いて、人間的な表現が再び新しい形に於いて浮び出てゐる。——而も

其處に於いては、プラトンの神話に於ける見失ふ事の許されない獨特な態度、深き眞面白と諷刺的な遊戯との間に於けるかの類稀なる浮沈が、我々の心を奪ふ。更に驚くべきは、彼の第七書簡に於けるもつとも切實にして重要な認識論的研究を、彼は最後に *ambos* と名付ける事によつてその眞面目を再び覆ひかくしてゐる。(J. Collin: *Theorie der Dia.*, S. 11.) 然り、藝術的表現の嚴格なる批判者であり、技巧を自然美より退けた彼にあつても尙、もつとも眞面目なる事は無邪氣にも神々の前の美しき戯れであつたのである。恐らく彼は對話者の列より身を引く事なしに、演舞と酒を嗜む一人の老人の中に、自己の性格を描き出したであらう。

辯争の中から産み出された眞理は果して何であつたか。ソクラテス的な知の形式によつて止揚された市井の臆測と主張は如何なるものに轉化したか。多分プラトンは、後代に於いて彼の思辨を追ふ我々以上に、それを孰知してゐた事に違ひない。それにもかゝらず、彼はそれに表現的な決定を與へなかつたのである。背後にあるものは、表現された對話の常にあるものである。永遠に善きもの美しきものは、言葉や技術によつて模寫されはしない。個別的なものに超越して實在するものを説く彼の有名なイデア論の如くに、眞理は、我々の理解以上に、否彼の理解以上に、な

高く聳えるであらう。彼は遂ひに神話を以て、最後の眞理を表現的に我々に訴へたのである。ゾインデルバントは、プラントの歴史的研究の困難は、彼のあまりに巧な、あまりに戯曲的な對話の構成である。我々は、それを理解する以上に、感じ、又洞察しなければならぬ。而もそのあらゆる努力にもかゝらず、彼が對話に與へた舞臺と時の關係、特定な個人の諷刺と攻撃、それ等のものは、我々には、殆んど見失はれてゐるであらうと云つてゐる。併し、プラトンから我々が受けた莫大な遺産、彼の辯證法が産み出した最後の眞理の方向を想像するのは容易である。それは永遠に越ゆるものゝ知識である。シュライエルマツヘルはプラトンの全著作は、その最初から一定の根本思想の下に、計畫的に、教授的に、發展的に積み上げられた大建築だと解釋してゐる。プラトンの辯證法が産み出したものを最も深く體得し、一切の雜多をその寛容な情緒の中に融合する事を知るシュライエルマツヘルにとつては、この考はまさに正しい。プラトンの著作を總じて對話と名付ける事も亦、彼の喜ぶ所であらう。

アリストテレスの方法は、固定した概念、加工されない素材、與へられた直觀からではなしに、我々にもつとも直接な現實から、我々に對して正にその如くにあるもの

から出發する。彼が、人と人との對話から眞理を見出すプラトンの辯證法から、その方法を受けついただと云はれるのは偶然ではない。何故なら、我々、に對して第一義的なものとは、畢竟、世界に現に公有された知識であり、したがつて人々の普通に語るもの以外ではあり得ないからである。たゞ、人生に於ける深奥な智慧を探究するものは、人々の眞面目なる遊戯、祭壇の前の温き會話であるが、物の存在と運動が考究されるのは、市場から離れた冷き學者の研究室である。アリストテレースの辯證法は個別科學の母、嚴肅な哲學の案内者となつた。

プラトンの哲學に於ける方法の如くに、彼の中心思想なる、個別の對象的に存在する極めて卑近なもの理想界への懷郷もまた辯證的である。個物の類似、したがつて又矛盾には、そのイデアへの辯證的な發展が考へられねばならない。プラトんに於いて、方法的な我と我との辯論が見られたる個別相互の矛盾として、判然と意識されてゐなかつたとしても、我々は其處に、反省するものと反省されるもの、無邪氣な巧な調和のある事を認めざるを得ない。それは、彼の語つた肉體と靈魂との關係に於いて、それを伺ふ事が出来る。肉體は反省されるべき我として、反省する我の外にあり、したがつて個物でなければならぬ。個物よりイデアへの發展、肉體から靈界

への解脱、それがプラトンの辯論である。アリストテレスの個物と實體の關係は、文献批判學的には最も困難なものであるらしい。彼はプラトンに於ける個物のイデア分有の思想の二元論的な矛盾を指摘することによつて、彼の見出した形相の概念を個物の中に於いた。個物が同時に眞の實在であると云ふ考は此處よりして必然であるが如くに思はれる。併し、アリストテレスが果して個物と區別して尙實在を存在論的に考へたかどうかを別としても、個物のこの靜かな存在性は、運動の概念によつて發展せしめられる。個物に内在する形相は、又運動のエネルギーでなければならぬ。かくて彼は、個物の最後に落ちつく場所を運動の彼方においた。形相は、彼にあつては、素材を構成する認識論的な枠ではない。物質は先に目的として、又はエネルギーとしての形相を既に持つて居り、運動の後にその形相を實現するのである。形相は潜勢力として、それ自身の目的に働く。かくて、彼の哲學は二つの極點の間を、物質と絶對に不動な動因としての神との間を上下する。物は凡てその向ふ所に落ちつく。水は流下して海となり、火は上昇して天を構成するであらう。我々は、この卓越したアリストテレスの運動原理の中に、辯證的なものを知る。だが、これは物質であると同時に形相(即ちエネルギー)である所の實體の辯證的な發展な

のであつて、アリストテレースの方法的辯證法ではない。彼の分析によつて、實體の存在性と運動の原理が益々明かにせられ、ばせられる程、彼の思想の意圖は益々不動である。世界史自體の辯證的な發展の原理をもたらし、た彼の近代の意味は大きい。彼の方法の出發點である所の *ἔπος ἡμῶν* が、彼の死後既に二千年餘を經過したのちに、その高次な現在の中に投げ入れられ、これを氣付く事を餘儀なくされた我々にとつて、彼の辯證法的意義は更に大きい。だがアリストテレースによつて唱へられた、*ἔπος ἡμῶν* に於ける肉體的な我々の位置に對して、彼は一般ギリシヤ的な文化の如くに又無邪氣であつた。彼の語つた所は、見られたる世界である。彼の探索したものは物の世界である。『我々にとつて第一義的なもの』は彼にあつては、決して歴史的であり得なかつた事が明瞭である様に、それは我々をもふくむ構成された全體ではない。それは、『我々に極めて手近な物である。彼は反省者の位置を疑つてゐない。彼は見るもの、分析をかへり見ない。従つて實體は彼にとつて何等對蹠的な意味を持つてゐなかつた。形相は我々に有用な意味ではなくして、物のエネルギーである。かくして、彼がたとへ彼の思考の出發をプラトンの辯證法よりうけつたとは云へ、彼の思考の結果は、物其物の存在であり、運動である。それは反省するも

のとされるものとの辯證法的な發展の結果ではなかつた。従つて若しアリストテレスの方法とその結果を辯證法的な發展の中に理解する事は、その思想の如何に驚嘆すべき近代的な解釋であるか知れざるにもかゝはらず、それはアリストテレス的に哲學する事ではなくて、アリストテレスを越えて哲學する事であると云ふ事が出來やう。彼の哲學は生物學の如くに冷たい。哲學史上に於いてもつとも卓越した體系を産んだアリストテレスの方法は、その後に来る第二の偉大な體系哲學者カントの方法と共に、最後まで辯證法的ならざる事を欲したと云へるであらう。アリストテレス以後のギリシャ哲學は、その政治上の權力の衰移とともに、著しい變動と消耗を示してゐる。文化史的に之は極めて重要な興味ある問題である。彼等の内的な考察が懷疑的に乃至は厭世的になつて行つたのは自然の勢である。彼等の哲學は勝利者の哲學ではなくして、既に敗者の哲學となつた。彼等は幸福を、だが一人の人間の諦め、の幸福を發見する事をつとめたのである。

ストア派のアバタイア、エピクロス學派のアタラキシアに於いて、我々は、個人倫理に於ける古來の貧しき諸聖賢の選んだ宗教生活の辯證法を見る。彼等がその後に進んだ嚴肅な世界主義や、怠惰な快樂主義を、我々は、純粹に彼等の初期に於ける沈痛

な生活上の決意と區別しななければならぬ。何故なら彼等の正直な地盤から發展したものは、その後に来る宗教時代の哲學だからである。地上的な幸福を否定する事が聖賢の静かな幸福となり、倫理的な不安は遂ひに宗教的なエクスタシスにまで高められて行つた。

だが、かゝる個人の實踐生活の極點に達したプロチノスの哲學は、も早辯證的な發展から退かなければならない。何故なら彼に於ける一者の認識が、どれ程困難なものであるにしろ、尙それは生の發展的な歸結ではなくして、論理的には先づ最初に直觀的に與へられたものであるからである。辯證法は常に産みの苦みの論理である。永遠の平和の信仰に立脚するものにあつては、確實な現實の安心から、その下降的分析に向ふものにあつては、辯證法はその影を失ふか、若しくはもつとも消極的な意義しか與へられないであらう。プロチノスの *synesis* は、先に述べた意味でのアリストテレシスのそれとはまさに正反對に、絶對的な *synesis* としてたゞちに體驗され、擱握されたのである。精神、靈魂、物質は、太陽より發された光の如くに、一者より流出されたものである。ト・ヘンよりヌースへの下降は、何等哲學的でなく、(したがつて辯證法的でなく)プロチノスは單に之を表象乃至象徴に於いて畫いたのである、と云つ

たヘーゲルの言葉は正しい。何故ならト・ヘンは恰も太陽の如くに、彼の華美な一切の造化にもかゝはらず、自己を失ふことなく、常に彼より低きものより獨立するからである。而も一層重要な事は、神と直接に交渉する事の可能なヌースは、たとへ光と暗への二つの異なつた方向を自己の中に抱くとしても、尙それは太陽の光の中に於いて争ふのである。矛盾がその争闘の場所を一層高次なものから先に與へられる時、それは矛盾の意味を失ふであらう。けれども、最後に、プロチノスをその先祖に頂いた、哲學史上の根強き一類型である神祕主義が、遂ひに辯證法をふくまない事は、我々にとつて又重要な課題である。

(この章未完)

この論文は、次のやうな目録を追ふて、完結するであらう。我々の最後の目的が、我々の記憶に常に新しく甦る様に、その表をこゝに示すが必要である。

序 論。

一、目的。

二、「辯證法」の歴史。

三、「辯證法」の出版。

本 論。

一、一般辯證法の歴史。(シユライエルマソヘルに至る)

辯證法に於けるシユライエルマソヘル

二、「辯證法」の概観

三、人と性格。

四、人と「辯證法」。

五、或る批評。